

特集 青年海外協力隊

つないだ、つながった

50年



## ルワンダの今

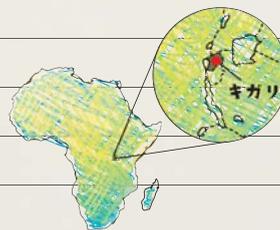
Rwanda ルワンダ



1994年、世界中を震撼させたルワンダのジェノサイド。たった100日の間に、80～100万ものルワンダ人が虐殺された。あれからちょうど20年という節目を迎えた2014年、私はJICA教師海外研修で現地に向かった。

「百聞は一見にしかず」の言葉通り、ルワンダの今は、私の予想を見事に真切ってくれた。「本当にこの国で20年前に大量虐殺があったのだろうか?」。そう目を疑いたくなるほどだった。人々は屈託のない笑顔で私たちを「ムズング」と呼び、温かく迎え入れてくれた。「外国人」を指している言葉のようだ。

写真の女性たちはジェノサイドで夫を殺され、未亡人となった。今は夫の代わりに一家の大黒柱となり、民芸品を作っている。そんな彼女たちから聞いた言葉が「悲しみをHappy & Strongに」。どんな苦境にも負けないという、強さとたくましさを感じた。



撮影：伊藤 恵（宮城県／仙台城南高等学校）

## あなたの作品募集中！

「my photo」では、あなたが撮影した写真を募集しています。貧困や環境問題などをテーマにした写真、国内外問わず国際協力の最前線で活動に励む日本人や開発途上国の人の姿、テレビや新聞ではなかなか報じられない土地の風景や人々の暮らしなど、国際協力や途上国を身近に感じられる写真を、撮影時のエピソードを添えてご応募ください。応募作品の中から毎号1枚、本コーナーで紹介させていただきます。

**応募条件** ①応募者本人が撮影した作品に限ります。②被写体に関する肖像権は、応募者の責任において了解が得られているものとします。③写真は、解像度が300万画素以上(目安)で撮影されていること、また画像の記録形式はJPEGを推奨します。

**応募方法** お名前、連絡先(電話番号とEメール)、エピソード(300～350字)、記名の可否をご記入の上、写真とともに応募先アドレスまでEメールでお送りください。  
\*応募作品は本コーナーの他に、事前確認の上でJICAの広報活動に活用させていただく場合があります。ご記入いただいた個人情報はこちら以外の目的では使用いたしません。また、応募作品はご返却いたしませんので、あらかじめご了承ください。

応募 / 問い合わせ先

jica-photo@idj.co.jp

(「mundi」編集部宛)

「mundi」はラテン語で“世界”。開発途上国の現状や、現場で活動する人々の姿を紹介するJICA広報誌です。

## Contents

02 my photo ルワンダの今 ルワンダ

04 特集 青年海外協力隊

## つないだ、つながった50年

巻頭対談 世界をつなぐ青年海外協力隊 湊かなえさん×真戸原直人さん

青年海外協力隊 ～50年の歩み～

共に、未来へ ラオス

算数で考える力を育む グアテマラ

農業で日本を元気に 岡山県

協力隊の経験が生きる



18 PLAYERS 教育が変える子どもたちの未来 KESTES

20 地域と世界のきずな

## 復興を支える協力隊の力

福島県



22 世界とつながる教室 女子高生が伝える世界の課題 松江市立女子高等学校

24 JICA STAFF 永野 りさ JICA青年海外協力隊事務局 募集課

25 JICA UPDATE

26 Voice 齋藤 富雄 公益財団法人兵庫県国際交流協会 理事長

28 ココシリ 「ここが知りたい」いろんなトピックを分かりやすく解説!

30 地球ギャラリー

ベナン

## ボードウンの力



37 イチオシ! 本・映画・イベント

39 MONO語り サイザルバスケットでお買い物

40 私のなんとかしなきゃ! 末吉 里花 フリーアナウンサー



JICAのビジョン

すべての人々が恩恵を受ける、  
ダイナミックな開発を進めます

Inclusive and Dynamic Development

表紙

撮影：久野武志

タンザニアの子どもたちに算数を指導する青年海外協力隊の弓場亮平隊員。工夫にあふれた授業で教室に笑いが絶えない



## 島国への憧れから 協力隊へ

**湊** 小さいころに『天国が一番近い島』を読んで、ずっと南の島に憧れていました。私にとつての、天国が一番近い島。はどこかと地図を見ていて、直感で引かれたのが「トンガ」。大学の卒業旅行で行こうと思っていたのですが、卒業前に阪神・淡路大震災が起こって、それどころではなくなってしまいました。

**真戸原** 僕は高校までは野球一筋。大学からバンド活動を始めました。いつか人に聞いてもらえるような音楽をつくれるようになりたい。その夢がかなったら、音楽を通じて誰かの役に立てることをしたいと思っていました。

**湊** 私はアパレルメーカーに就職してから、通勤バスの中で人生の転機が起こりました。青年海外協力隊の広告を見つけたんです。「海

## 巻頭 対談

# 世界をつなぐ青年海外協力隊

2015年、青年海外協力隊  
事業が50周年を迎えた。  
これまで世界各地で生み出され  
てきたさまざまなストーリー。  
協力隊を経て小説家にな  
った湊かなえさん、  
ミュージシャンの真戸原直人さんが  
現役隊員の活動を視察したミ  
ュージシャンの真戸原直人さん  
その魅力を語



グアテマラの協力隊の教え子たちと歌のセッション



協力隊時代、トンガの派遣先の学校の先生たちと



© Shinichi Kuno

外に行くのにこういう方法もあるんだ」と驚きで、でも木を植えたり、井戸を掘ったりするイメージが強く、とても自分にできるものではないと思ったのですが、とりあえず説明会に行くことにしました。

**真戸原** 僕も小学生のころ、協力隊の紹介を教科書か何かで見たことがあるんですが、同じようなイメージを持っていましたね。海外にボランティアに行く人は、とにかくストイックで無欲。普通の人には手の届かないものだと思っていました。

**湊** でも説明会でもらった冊子に、トンガで家庭科を教えるという活動があったんです。これは私が行くしかない！と（笑）。面接でも「トンガじゃないと行きません」くらいの勢いでした。

**真戸原** それは運命的な出会いですね。僕を国際協力に導いてくれたのは、プロ野球の和田毅投手でした。彼が1球投げるごとに10本ワクチンを寄附しているというCMを見

て、めちゃくちゃカッコいいなと。僕はミュージシャンとして、CDの売り上げの一部を支援に充てることにしたんです。

**湊** そういう人生のタイミングは、大事にしたいです。長年の夢に手を伸ばせば届くところまできて、会社を辞めて協力隊への参加の道を選びました。父親も出張で海外によく行っていたので、理解はありましたね。

## 試行錯誤から 得られるもの

**湊** トンガは治安も良く、気候もとても快適でした。イギリス保護国時代はフレンドリーアイランドと名付けられていたくらい人も親切で優しい。いわゆる開発途上国の過酷なイメージとは違いました。

**真戸原** 僕は2年前、協力隊員の方々に会いに、初めてアフリカに行きました。それがマラウイ。アフリカといえば「暑い」と思っていたので、少し肌

寒くて最初から驚きました。やっぱり、実際に行ってみないと分からないものですね。

**湊** トンガにも、初めて知る課題がありました。現地の人たちは、お肉の脂身などが大好き。肥満が深刻でした。私が家庭科の授業で栄養バランスなどについて指導しても、「何が悪いんだ。神様の近くに行けるんだし、死ぬことなんて怖くない」の一点張り。知識として教えることはできても、実践に結び付けるのはとても難しかったです。

**真戸原** 僕が出会った協力隊員たちも、文化や習慣の違いに悩んでいました。でもみんな困難を自分の糧にしていて、現地の人たちの思いをくみながら、最善の方法を考える努力には頭が下がりました。その表情は生き生きとしていました。

**湊** 私は2年間、「私がここに来た意味は何だろう」と、ずっと葛藤がありました。それでも、同僚たちと一緒に教材作りを頑張ったり、健康的な食生活を広めるイベントを開催したりと、悩みながらもやりがいのある日々でした。

家になって…。毎日いろいろなことに追われて、しばらくトンガとは疎遠になっていました。でもある日、「ホストファミリーが連絡を取りたがっている」と電話が来たんです。メールを使えるようになったから私と連絡を取りたいと、現地に仕事で訪れた日本人の方に聞いてくれたみたいで。うれしくて電話もしてしまいました。

**真戸原** そうやって、縁があれば人はつながっていくんですね。僕も現場でまさにそう感じたところなんです。世界の至るところで、彼らが日本との懸け橋になってくれていたんだと。僕は自分の体験を音楽に生かすことも多いのですが、湊さんは協力隊時代のことを小説にしないんですか？

## 小さな思いから 世界が広がる

**湊** 帰国してからは家庭科の講師になり、結婚して、小説

**湊** 実は私の小説には、たまにトンガの話が出てくるんですよ。協力隊は小説を書くために行ったわけではないですし、取材ノートが残っているわけでもない。でも10年以上たっても記憶に残っていることは、私にとって大切なことなんだろうなあと思っています。ずっと忘れられない、忘れたくない体験ですね。

**真戸原** 今回、協力隊50周年のイメージソングを担当させていただくことになりました。今まさに制作中ですが、キーワードは「つながる」です。協力隊に参加することで途上国の人たちとつながり、帰国後もその経験を通じて新たなつながりが生まれていく。そんな協力隊に感動、共感する人がいたから50年も続いてきた。それが伝わればいいですね。

**湊** 最近、若い人が海外に出たがらないと聞きます。世界を変えようとか、大きな志は必要ないんです。小さな思いがあるのなら、思い切って飛び込んでみてほしい。これまでの50年を次の50年につなげるために、もっと多くの人に協力隊について知ってもらいたいですね。

湊 かなえさん × 真戸原 直人さん

MINATO Kanae 小説家

1973年広島県出身。大学卒業後、アパレルメーカーを経て青年海外協力隊に参加。帰国後は家庭科の講師をしながら執筆活動を開始。2009年に『告白』（双葉社）が第6回本屋大賞を受賞。『夜行観覧車』（双葉社）、『白ゆき姫殺人事件』（集英社）などヒット作多数。

MATOHARA Naoto ミュージシャン

1977年大阪府出身。99年にロックバンド「アンダーグラフ」を結成。2004年にシングル「ツバサ」でメジャーデビュー。CDの売り上げの一部を開発途上国のワクチン購入に寄付するなどの国際協力に取り組み、協力隊の活動をマラウイとグアテマラで視察。

1954 「コロンボ・プラン」への参加をきっかけに、日本が政府開発援助（ODA）をスタート

### 1965

4月

開発途上国への技術協力、相互理解、青少年育成を目的として、「日本青年海外協力隊（JOCV: Japan Overseas Cooperation Volunteers）」を創設

9月

選考試験実施  
463人が応募

10月

派遣前訓練開始



12月

初めての派遣、  
1次隊5人がラオスへ



1966

1~3月 カンボジア、マレーシア、フィリピン、  
ケニアへ35人を派遣



1968

広尾訓練所（東京）開所

1974

「青年海外協力隊」に改称



### 1975

協力隊創設10周年！

記念映画「アサンテサーナ わが愛しのタンザニア」完成

1965年、戦後の混乱を経て立ち上がった日本から、5人の若者たちがラオスに旅立った。彼らこそが、今や日本の、草の根の外交官として知られるようになった青年海外協力隊。その50年の歩みを振り返ってみよう。

# 青年海外協力隊

## 50年の歩み

1979

駒ヶ根訓練所（長野）開所



### 1985

協力隊創設20周年！

日本の青年の中南米への移住促進を目的とした「海外開発青年」を創設

### 1990

協力隊総派遣数が1万人を突破

40歳以上を対象にした「シニア協力専門家」、  
「移住シニア専門家」を創設



1994

二本松訓練所（福島）開所

1995

協力隊創設30周年

1996

「シニア協力専門家」を「シニア海外ボランティア」に、  
「海外開発青年」を「日系社会青年ボランティア」に、  
「移住シニア専門家」を「日系社会シニア・ボランティア」に改称

### 2000

協力隊総派遣数が2万人を突破

2005

協力隊創設40周年  
広尾訓練所閉所

2012

日本の民間企業と連携して現職社員を派遣する「民間連携ボランティア制度」創設

### 2015

協力隊創設50周年！



特集 青年海外協力隊  
つないだ、つながった50年

これまでの派遣数は、**96**カ国  
累計 **4万6,926**人

(2014年11月末現在)

[ 青年海外協力隊 ]



3万9,717人

© Kenshiro Imamura

[ シニア海外ボランティア ]



5,566人

© Satoshi Takahashi

[ 日系社会青年ボランティア ]



1,188人

© Koji Sato

[ 日系社会シニア・ボランティア ]



455人

© Atsushi Shibuya



それでも車で1時間も郊外に向かえば、その光景は一転、あっといふ間にのどかな農村になる。すれ違う人々のはにかむ笑顔。この国には、確かに穏やかな時間が流れていた。

1965年、5人の日本人の若者がこの地に降り立った。彼らこそが第一号の青年海外協力隊。それから50年にわたり、隊員たちは日本とラオスの懸け橋となり続けてきた。

その現場を見ようと、ビエンチャンから飛行機で約1時間、北に位置するウドムサイ県へ向かった。目指すは、産業商業局の生産・マーケティングセンター。この地域では、かつて麻薬の原材料となるケシ栽培が盛んだったため、麻薬撲滅に向けた代わりの生計手段として、手工芸品作りが推奨されてきた。同センターはその小売・卸を担当している。

迎えてくれたのは、青年海外協力隊員の新井貴久さん。センター内には、植物の繊維やコットンを使ったバッグやポーチ、ストール

「バッグの生産者に会いに行ってみますか？」

新井さんに案内されて、がたがた揺れる山道を車で進むこと1時間半。ラオスの少数民族の一つ、カム族が暮らすマン村に着いた。そこには、また違う風景が広がっていた。伝統的な高床式の家が

**この地にある伝統を商品に生かす**

などが並んでいる。「8つの村の女性グループが作っています。彼女たちが暮らす山間部は街からのアクセスが悪く、農業中心の生活。手工芸品作りは貴重な現金収入源です」と説明してくれた。

大学卒業後は、金融機関で中小企業向けの融資を担当していた新井さん。さまざまな企業の経営改善に携わってきた経験でラオスで生かしたいと、お客さんがじっくり見てくれるようなディスプレイや商品を説明するポップ、宣伝用のポスターやリーフレットを作成したりなどの工夫をこれまで提案してきた。

並び、子どもたちは外国人が珍しいのだから、近付くときやあきやあ笑いながら逃げていく。街から離れた山岳地域だからこそ昔ながらの暮らしだ。

「この女性たちの技術はすごいんですよ」

新井さんの言葉通り、クズという植物のつるをナイフで割って繊維だけをこそげ取り、一瞬でより合わせて細いひもを作り出す。丈夫で水にも強く、軽い。それを使ってバッグを編むのだが、「簡単に見えても実際にやるととても難しいんです」と新井さん。カム族の女性たちに受け継がれてきた伝統技術なのだ。

「タカと一緒にバッグを作れて楽しいよ」

そう笑ってくれたのは、女性グループのリーダー、セーンさん。人の温かさ、地域の結び付き、自然と共に生きる力。今の私たちが失いつつあるものがラオスにはある。

新井さんが力を入れているのは、彼女たちの技術を生かし、観



いつも作業している村の憩いの場で、「クズからこうやって繊維を取るの」と見せてくれたマン村のセーンさん(左)と新井さん

# 共に、未来へ

青年海外協力隊が初めて派遣された国、ラオス。現地の人々と共に歩む。隊員たちのその姿勢は受け継がれ、各地で実を結んでいる。その現場を見ようと、ラオスへ飛んだ。

写真：今村健志朗（フォトグラファー、青年海外協力隊OB）



僧侶の托鉢はラオスの象徴。ビエンチャンでも朝6時半ごろから始まる

**50年の歴史が始まった国へ**

豊かな自然にあふれた穏やかな暮らし。ラオスといえばそんなイメージだった。

ちょっと地味と言ったら怒られてしまうかもしれないが、アジアの国々の中でも「秘境」。しかし意外にも、首都ビエンチャンは都会だった。高層ビルが立ち並び、朝夕には渋滞が起きる。街角にはフランス植民地時代を思い出させるおしゃれなレストランやカフェもある。



ラオス  
from **Laos**



ウドムサイ名産のコットンを使ったストール。巻くとどんな形になるかわかりやすいように写真も展示



ウドムサイの人々にも観光客にも商品を知ってほしいとリーフレットを作成。ケースも新井さんお手製だ



淡い色使いなど、日本人のセンスを取り入れて開発した商品が並ぶ。同僚のウンカム・オンパチャンさん(左)とシリウォン課長(右)



かり。体のバネを鍛える筋力トレーニングや、レシーブなどの基礎ができれば、攻撃力のあるスパイクにはつながらないのに……」そこで日本式の練習方法を参考に、基礎練習から試合形式の練習、筋力トレーニングを取り入れた。選抜選手の多くはまだ高校生。練習後に合宿所へ帰る途中、屋台に立ち寄って豆乳を飲んだり、スマートフォンに夢中だったり、その素顔は日本の高校生と変わらない。



毎回円陣を組み、気合を入れる選手たち。「国体で絶対勝つ!」とやる気だ



練習試合のビデオを見ながら反省会。選手たちが自分で考え、話し合い、作戦を練る

しかし、合宿所に着くなりテレビの前に座り込んだ。「私を含めた大人3人との練習試合を撮ったビデオを見ながら反省会をやりませ」と本間さん。疲れているだろうに、みんな真剣だ。「このフォーメーションの時、あなたの位置はここじゃないよね?」「あつ!向こうのコートのここが空いているから、狙ってスパイクを打たなきゃ!」気になる場面ではビデオを止めて、とことん話し合う。最後には「みんなでミスをなくして、改善して、頑張ろう!」と、本間さんではなく、選手の一人、ケオヴィアンペット・トラーティさんが呼び掛けた。赴任当初は、練習に時間通りに来なかったり、すぐに「疲れた」を連発したりしていた選手たち。

顔は充実感に満ちていた。隊員にも現地の人々にも笑顔があふれていたラオス。計画投資省国際協力局のサイモンカム・マンノメック副局長は、「ラオスではこれまで800人を超える隊員が活動しています。これからは彼らの活躍に期待しています」と話す。人々と同じ目線で暮らし、共に歩いていく。今までも、これからは変わらない。それが、協力隊だからこそのことだ。



青年海外協力隊  
第1号  
星野昌子さん  
からのメッセージ

## 第2の人生、協力隊へ

青年海外協力隊に参加したのは1965年。戦争を経て経済大国になろうと日本がやっきになっていた時代です。海外に行くのはまだ珍しく、周りからは「協力隊って何?」という反応でした。

私の父はハワイで移民として過ごし、世界

を知っていた人。そんな環境で育った私は、数少ない女子学生として大学で学び、英語・フランス語を身に付けました。結婚・出産後に日本語教師をしていた時に偶然見かけたのが協力隊の新聞広告。「私の第2の人生はこれだ!」と思いました。

日本語教師としてラオスに赴任したものの、教室もなく生徒も集まらない。あせんとしましたが、まずはラオス語を学ぼうと気持ちを切り替えました。ラオスでは、学校の成績といった日本で評価される能力なんて関係ありません。自分の潜在能力を掘り起こし、全身全霊でできることをしないと毎日を過ごせない。彼らの生活に入り込むことが必要だと考えました。そして赴任から半年後には日本語教室の開校にこぎつきました。先には絶

対楽しいことがあるから進もう!と考えるのが私の性格なんです。

モノやカネではなく、心に価値を置くラオスの人々と過ごし、こちらが教えるなんてとんでもない、むしろ学ぶことばかりでしたよ。



技術学校の校舎を間借りし、星野さん(右奥3人目)たちが開校した日本語教室

## スポーツを通して伝えたいこと

ウドムサイ県は、3年に一度、約20種類のスポーツ選手が集結する全国体育大会の舞台。県を背負う「このフォーメーションの時、あなたの位置はここじゃないよね?」「あつ!向こうのコートのここが空いているから、狙ってスパイクを打たなきゃ!」

って戦いを繰り広げ、ラオスじゅうが盛り上がる一大イベントだ。その国体に向けて活動している隊員がいると聞き、隣のサヤプリ県に向かった。ピエンチャンから飛行機で1時間の古都ルアンパバインから、さらに車で2時間。道路は舗装されていて快適な旅だった。

県中心部の体育館に着くと、「ハイツ!」と元気の掛け声、ボールが弾む音が聞こえてくる。学生時代の部活の時間を思い出す懐かしい音。中に入ると、女子選手がバスヤトス、レシーブの練習をしている。女子バレーボールの県選抜チームが合宿中だ。「ピツ!」と笛を吹いて指示を

出しているのが、青年海外協力隊員の本間唯子さん。中学から大学までバレーボールを続けた経験を生かし、海外で活動したいと協力隊に参加した。本間さんが目指しているのは、県内のバレーボール選手のレベルアップ。「赴任当初は、選手たちは練習時間にスパイクを打ってば

光客に売れる商品作りだ。セーラーさんたちは普段からクズで編んだショルダーバッグを使っているが、大きすぎてお土産に向かない。そこで、サイズを小さくし、染めたひもを使ってストライプ柄にするなど、新しいデザインを取り入れている。共に活動する製品開発課のマイポーン・シリウォン課長も、「より多くの消費者の目に留まる商品を作りたい。最終的には輸出を目指しています」と期待を寄せている。



同僚のターヴォン・クントーンさんと共に練習する本間さん。「ユイコはとてもアクティブで頼りになる」と息もびったり

解決のカギは、グアテマテイカを使ってきちんと指導できるよう、先生たちの意識を変えていくこと。そう考えた木村さんは2校以外の小学校の先生も集めて、研修会を開くことに。グアテマテイカに沿って、目で見て分かりやすい図表などを取り入れながら、分数や小数点などを教えるコツを伝えるためだ。

さらに、これまでは地域の先生同士で情報を共有する機会がな

年に国定教科書になっているが、赴任当初、2校ではほとんど使われていなかった。先生ごとに好きな教科書を使い、しかも教えることといえば、基礎的な足し算、引き算、掛け算、割り算ぐらいだった。

「この国はカーニバルなどの行事が多く、授業をつぶして準備に充ててしまいます。教員の指導力も足りず、分数や小数点、図形などの分野は教えられていませんでした」と木村さんは話す。

「この国はカーニバルなどの行事が多く、授業をつぶして準備に充ててしまいます。教員の指導力も足りず、分数や小数点、図形などの分野は教えられていませんでした」と木村さんは話す。

「この国はカーニバルなどの行事が多く、授業をつぶして準備に充ててしまいます。教員の指導力も足りず、分数や小数点、図形などの分野は教えられていませんでした」と木村さんは話す。



[右] 現地の先生の授業を観察し、授業後に良かった点や改善点を話し合う木村さん [左] 100ごとのまとまりで数をとらえることを学ぶ子どもたち。現地の先生の授業中に理解度を確認する



計算だけが  
算数じゃない!

「ボルケ?」  
この単語が、教室で子どもたちに何度も投げ掛けられる。「なぜ?」という意味のスベイン語だ。「なぜ、この計算の答えは5になっただろう?」  
「なぜ、三角形の面積は長方形の面積を2で割るんだと思う?」  
グアテマラ西部、コミタンシージョの小学校での算数の時間。子どもたちが懸命に、自分で答えを導き出すプロセスを考えている。実はこれ、以前の授業とはまったく違う。その変化のきっかけをつくったのは、この地域の教育事務所配属されている青年海外協力隊員、木村嘉秀さんだ。

「ボルケ?」  
この単語が、教室で子どもたちに何度も投げ掛けられる。「なぜ?」という意味のスベイン語だ。「なぜ、この計算の答えは5になっただろう?」  
「なぜ、三角形の面積は長方形の面積を2で割るんだと思う?」  
グアテマラ西部、コミタンシージョの小学校での算数の時間。子どもたちが懸命に、自分で答えを導き出すプロセスを考えている。実はこれ、以前の授業とはまったく違う。その変化のきっかけをつくったのは、この地域の教育事務所配属されている青年海外協力隊員、木村嘉秀さんだ。

算数で考える力を育む

算数といえば、計算の授業しかない中米グアテマラ。青年海外協力隊員の木村嘉秀さんは、子どもたちに考える力が身に付くように、教員たちを巻き込んで授業の改善を進めている。

子どもたちの反応も変わった。最初は、答えが言われるのをただ待っていたり黒板を写すのに必死だったが、今は自分で考えて問題を解く楽しさを知り、発言も増えてきた。

木村さんは、算数リーダーズと名付けた4人の教員を各学校に派遣し、現地の人々自身で指導力を伸ばせるように後押ししていく。「算数が好き!」

グアテマラ全土の子どもたちがそう言ってくれる日を、木村さんは夢見ている。



日本人のように恥ずかしがり屋が多いというマヤ民族の血を引く子どもたち



教員対象の研修会では、木村さんが手作りの教材を使いながら小数点について分かりやすく解説

職員室がないため、授業が終わった教室で教員が集まり、授業を視察して気付いた点を話し合い、表にまとめる



グアテマラ  
from Guatemala



農作業に汗を流す塩飽さん。地域のひとたちと知恵を出し合い、さまざまな商品を開発している

えていた。手入れが行き届かない土地は荒れ、生まれ育った故郷はすさんで見えた。「地元をなんとか元気にしたい」。そう考えた塩飽さんは、もともと農家だった実家の農地を利用して、会社勤めの傍ら「塩飽農園」を始めることに。使われなくなっていた周辺の農地の持ち主にも声を

### 隊員時代が人生を楽しくしている

また、塩飽さんは「農業の大切

かけ、コメや野菜、栗、ブドウなど約20種類を栽培・収穫している。「大規模化は無理。手間暇かけた本来の農業を目指したい」と意気込む。

新しいことをすると、難しい壁にぶち当たることがある。しかし隊員時代に培った何事にもあきらめずに挑戦する粘り強さと、さまざまな分野で活躍する隊員仲間のネットワークに支えられて、大変なことでも楽しみながら乗り越えてきた。

今や1・7ヘクタールほどにまで広がった農園。そこで採れた野菜や果物を使って、地域のひとと一緒に開発してきた商品は数十種類に上る。近所のおばあさんが健康のためにと作っていたウコンを

使ったジェラート、梅干しや焼き紫イモを使ったアイスクリーム、天然のヨモギやスギナを利用したまんじゅう、栗をたっぷり使った羊かんなど「思い出せないほどのくさん」あるそうだ。

こんなにも獨創性にあふれた商品を次々に生み出せる秘訣は何か。塩飽さんは「エチオピアで学んだところが大きい」と言う。「物的に限られた環境の中で、何かを成し遂げるためには人とのつながりが必要だと知りました。協力隊の2年間でなければ今の人生はありません。現地の人と一緒に、近所の人とあてもない、こうでもないとおしゃべりする中からアイデアが生まれている。

現在、「塩飽農園」の仲間には近所に住む老若男女20人ほど。農業が難しいお年寄りには、雑草やクズを集める軽作業を任せるなど、それぞれが楽しみながら農業に携われるよう工夫している。売り上げにこだわらず、協力し合いながら笑顔になれることが一番だと考えているのだ。

いつも「わくわく」がモットーの塩飽さん。エチオピアから帰国して間もないころ、近所のおばあさんに「いい顔しているね」と言われたことがある。そのいい顔が広がり、日本の地域を元気にしている。



### エチオピアで見直した「食」の重要性

岡山県からローカル線で約1時間。県の南西部に位置する井原市の山間部で農園を運営する塩飽康利さんは、今から28年前、アフリカにいた。

小学生の時、スエズ運河やパナ

マ運河を築いた偉人の話を知り、「いつか自分も海外で働きたい」と憧れた。転機は25歳。「挑戦するなら今だ」と動いていた建設会社を辞め、3度目の正直で青年海外協力隊に合格。土木の技術を生かし、エチオピアで農業用水路の整備などに携わった。「何か役に立ちたいと思って行



エチオピアの隊員時代。測量や機材の使い方など、試行錯誤しながら現地の人と一緒に土木工事に携わった

ったけれど、教えられることの方が多かった」と振り返る塩飽さん。工期なんて気にしない、そんな現地の人々の感覚に驚くこともあった。しかしそこには、異なる価値観を受け入れてこそ見えてくる世界があった。100万人以上が餓死するほど飢餓が深刻化していた1980年代のエチオピアでは、

隊員が自分の食料を確保することさえ簡単ではなかった。「食」の重要性を実感しました。

帰国後は井原市に戻り、当時、世界最先端技術ともいわれた半導体の関連会社に就職。ロボットの組み立てなどの仕事で再スタートしたが、地元では、農地の担い手不足などが原因で耕作放棄地が増

## 農業で日本を元気に

青年海外協力隊員としてアフリカに赴任したのは1980年代。塩飽康利さんはエチオピアで農業土木分野の支援に携わり、帰国後、地元・岡山で地域を元気にする農園の活動を続けている。



岡山県  
from Okayama



【右】地元の高校でエチオピアでの経験や世界の食料問題について話す塩飽さん  
【左】「ももたろう国際救援隊」の活動の一環で、台風被害を受けたフィリピンに物資を輸送

## 大学

### スポーツを通じて 国際協力に貢献

2014年4月、学内に「国際交流センター」が新設されました。日本政府が掲げたスポーツを通じた国際協力「スポーツ・フォー・トゥモロー」プログラムの取り組みに対して、本学も体育・スポーツを通じた国際協力・国際交流の推進を掲げ、活動していくためです。

私自身は大学卒業後、日系社会青年ボランティアの野球隊員としてブラジルで2年間活動しました。多様な価値観に触れ、私の人生を大きく変えてくれました。その体験から、多くの学生、そして卒業生に開発途上国に飛び出してほしいと思います。また、本学の資源を



日本体育大学 国際交流センター／野球部コーチ

## 黒木 豪さん

生かして、学校体育のシステム構築、スポーツイベントの開催、人材育成など、途上国でのスポーツ環境の整備に貢献できるのではないかと考えています。

卒業後でなければ参加できない長期ボランティアだけでなく、現役学生も参加できる方法を模索し、2014年3月には約1カ月間、ブラジルに野球部員15人を派遣し、日系人の学生さんたちを対

象に野球教室を開きました。

これからもJICAと連携し、カンボジア、ネパールにも短期ボランティアを派遣する予定です。こういった派遣を増やすことで、将来的には、長期ボランティアへの参加を推進していきたい。そして青年海外協力隊に参加した卒業生たちが、2020年東京オリンピックで活躍してくれるよう願っています。



昨年3月にブラジルで現地の子どもたちに投球指導する日体大の野球部員

## 地方自治体

### 住民の心に 火を付ける力を育む

京都市では青年海外協力隊をはじめJICAボランティア経験者の活動に感銘を受け、採用試験に彼らを対象とした特別枠を設け、これまで教員40人、職員25人を採用しました。

地方自治体の職員には、住民の方々の心に火を付け、地域の最大の宝である住民力を引き出す職員力が求められています。そのためには、高い志を持ち、心が燃えていなければなりません。JICAボランティアの経験者を迎えたい最大の理由は、彼らが持つ高い志と実践力に他なりません。

困難な課題を抱えた国に赴き、言葉



京都市長

## 門川 大作さん



「JICAボランティア経験者が京都市に貢献できること」をテーマに市長と意見交換

も通じない、時には善意すらも通じない中で、全力を振り絞って活動する。それをやり遂げることができるのは、彼らに人や社会のために貢献したいという高い志があるからこそです。

実際に京都市の教員・職員となっても、臆せず保護者・住民の懐に飛び込んでいく挑戦心があるという評価が多く、私も心強く感じています。そのよう

に1歩、2歩と踏み込んだ仕事こそ、将来、意義のある結果を生み出せるからです。

世界を視野に物事を考えることはもちろんのこと、日本の文化や伝統もよく理解されているJICAボランティア経験者の皆さんに、ぜひ今後も京都市の未来をつくる仕事に参画していただきたいと考えています。

特集 青年海外協力隊  
つないだ、つながった50年

## 企業

### 海外展開に欠かせない開拓精神

日本の種苗業界の中でも、早くから海外市場や海外の種子産地の開拓を目指していたこともあり、海外に強い人材が必要でした。そこで出会ったのが青年海外協力隊の経験者。1973年以来採用を継続しており、現在は22人が働いています。

野菜隊員としてブータンで活動した社員は品種改良に力を注ぎ、村落開発普及員としてチリで活動していた社員は、中南米の種苗会社と種子生産の交渉などに奮闘しています。私がキューバに出張した際に同行してもらったことがあ

りますが、現地の人々が舌を巻くほど上手にスペイン語を話していました。また、言語だけでなく彼らの持つコネクションを通して、現地との深いつながりができたこともありました。

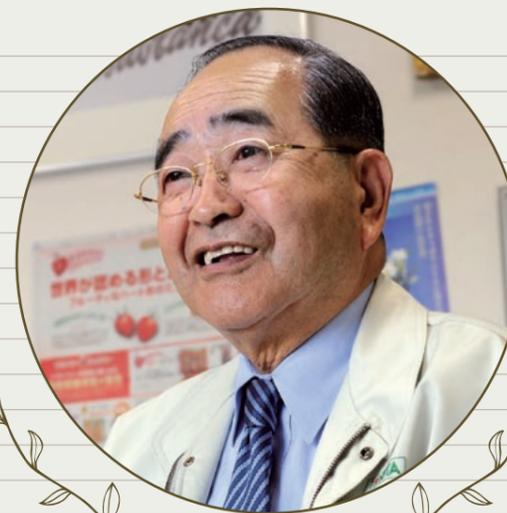
協力隊経験者の社員に共通している特徴は、開拓精神に富んでいること。海外での仕事や未知の分野、新しいビジネスなどに挑戦してみようという気持ちが強い人が多い。また、柔軟性や社会性があり、謙虚な人も多く、新たな業務になじむのも早いと思います。

国内の種苗市場は小さくなっています



イタリア野菜の展示会で、国内栽培用に品種改良した種子について説明する協力隊OB

が、海外ではまだまだ開拓の可能性が十分にあります。物おせずに道を切り開いていける協力隊経験者とともに、海外展開を通じてさまざまなことに挑戦していきたいと思っています。



トキタ種苗株式会社 代表取締役会長

## 時田 勉さん

# 協力隊の 経験が生きる

開発途上国で文化や習慣の違いに直面しながら、より良い社会のために現地の人たちと奮闘する青年海外協力隊。その経験が、日本各地のさまざまな場所で花開いている。

奨学金を得て学校に通えるようになったオチング・ティベリアスさんを、担当の濱田裕介隊員が定期的に訪問している



かつてKESTESの奨学生だったキホロさんの母校でのイベント。委員長の堀さん(左)、前委員長の藤城友昭さんが招かれた

「学費を払っていない人は、今すぐ出ていきなさい」  
 そう言われ、学校から追い出される子どもたちがいる。そんな国がこの世界にはあるのだ。  
 その一つが、東アフリカの経済の中心地ケニア。目覚ましい発展を続けているにもかかわらず、全ての人が教育を受けられるわけではない。  
 特に農村の家庭では、中等教育に進めない子どもが多い。学費や制服代、寮費、給食費などが、家計から捻出できないからだ。水くみやまき拾い、小さな弟妹たちの世話など、家での仕事を優先しなければならぬ場合もある。子どもたちにくらやる気がある

「学費を払っていない人は、今すぐ出ていきなさい」  
 そう言われ、学校から追い出される子どもたちがいる。そんな国がこの世界にはあるのだ。  
 その一つが、東アフリカの経済の中心地ケニア。目覚ましい発展を続けているにもかかわらず、全ての人が教育を受けられるわけではない。  
 特に農村の家庭では、中等教育に進めない子どもが多い。学費や制服代、寮費、給食費などが、家計から捻出できないからだ。水くみやまき拾い、小さな弟妹たちの世話など、家での仕事を優先しなければならぬ場合もある。子どもたちにくらやる気がある

### 教育は未来を切り開く力

掘泰洋隊員は、「交通の便が悪くて訪ねるのが大変な生徒もいますが、一人一人と親密な関係を築いているのがKESTESの強み。現地の人々と生活を共にする隊員ならではの支援を通して、ケニアのより良い発展に貢献するのが目標です」と話す。

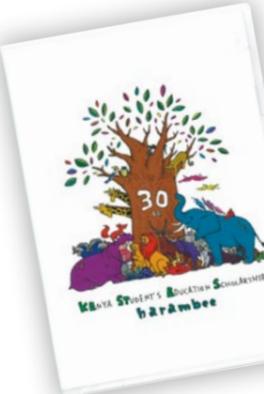
キホロさんもいる。  
 86年、貧しい家庭に育ったキホロさんは授業料未納のため、学校に行けなくなっていました。しかし、教える子である彼の数学の能力の高さに気付いていた黒田孝伸隊員(当時)が彼の家を訪れ、学業を続けられるように両親を説得。キホロさんはKESTESの選考を見事通過し、奨学金を受けることができた。その後は学校の先生をしながら勉強を続け、ついには博士号を取ることができたのだ。  
 「今の自分があるのはKESTESのおかげ」と話すキホロさん。堀さん

も「経済的な困難があっても、努力を続ければ道が開ける可能性がありませ。自分の生徒たちにもそう伝えていきたい」と抱負を語る。  
 こうした現地での活動をサポートし、日本での口座の管理や国内での広報活動を担当するのが日本窓口。そのスタッフもみんなケニアの隊員経験者だ。代表を務める金田健一さんも、2000年から理科教科教員の隊員として活動し、今は小学校教員として多忙な日々を縫ってボランティアで活動に関わっている。  
 「国際協力系のイベントに出展すると、まだKESTESってあるんだ!」と、大先輩の隊員経験者から声をかけられることもあり、歴史を感じます」と話す。「世界の人びとのためのJICA基金」も活用しながら、アクセスを増やすためにホームページをリニューアルしたり、ウェブから寄附ができるシステムを導入したりと奮闘中だ。  
 「KESTESがこんなに長く続いてきたのは奇跡です」と語る金田さん。その言葉通り、08年のケニア大統領選挙後に暴動が起きた影響で一時解散したこともあったが、すぐに復活した。ケニアの未来を変える大人に育ってほしい。その思いをこれまで引き継いでこられたのは、まさに隊員たちの団結のたまものだ。これからも子どもたちの新しい未来のために、みんなで支え続けていく。



日本窓口の金田さん(前列左から2人目)をはじめ、ケニア隊員経験者が協力してグローバルフェスタに出展

元隊員のデザイナーが作成したKESTESオリジナルグッズを販売し、好評だった



※青年海外協力隊在ケニア隊員有志による奨学金制度 (Kenya Students' Education Scholarship) の略称。



国際協力の担い手たち

ケ ス テ ス

# KESTES

## 教育が変える子どもたちの未来

お金がないために学校に行けない。  
 そんな子どもたちの力になりたいと、  
 ケニアの青年海外協力隊員が立ち上げたKESTES。  
 その活動は代々受け継がれ、子どもたちの未来を明るく照らしている。



学歴によって就ける仕事に限られてしまうケニア。教育を受けられるチャンスが人生を左右するため、奨学金が果たす役割は大きい



### 福島県

面積約1万3,780km<sup>2</sup>。人口約195万人。北部に位置する二本松市には青年海外協力隊が派遣前に滞在する訓練所があり、これまでに巣立った隊員は1万人を超える。また、福島県出身の隊員は「うつくしま国際協力大使」に任命され、福島県と世界の懸け橋となることが期待されている。

### 地域に支えられた 訓練所が20周年

郡山市から東北本線で約20分、福島県の内陸部にある二本松駅。ここでは3カ月に1回、ある光景が見られる。駅に続々と到着する若者たちが、市内から車で約20分、青年海外協力隊の訓練所へと向かう。派遣前の約2カ月半、活動する国の言語や開発途上国で暮らすためのノウハウを学ぶのだ。緊張した面持ちの彼らを、「ようこそ二本松へ」の横断幕を持った地元の人たちが温かく迎える。にほんまつ地球市民の会のメンバーだ。

2014年は、二本松訓練所設立から20年の節目の年。自身も協力隊出身の北野一人所長は、「これも支えてくれた地域の力のおかげ」と話す。11月15日に開催された20周年記念式典では、県や市はもちろんのこと、隊員が普段利用している岳温泉のお店やクリーニング店、タクシー会社など、地域に根付いた100以上の団体に感謝状が送られた。

「隊員の皆さんには、復興に取り組み、新生ふくしまの姿をそれぞれの活動国で伝えてほしい」と式典で話したのは、村田文雄福島県副知事(当時)。東日本大震災以降、訓練期間中には被災地を視察する機会がある。国際社会での風評被害の払拭のため、福島県の姿を伝えるのも隊員たちの使命なのだ。訓練所は、途上国に送り出すだけの一方通行の場所ではない。北野所長

# る協力隊の力

東日本大震災からまもなく4年になる。福島県では、世界に羽ばたいた青年海外協力隊の経験者たちが、その復興の担い手として活躍している。

## 福島県



二本松駅に到着した青年海外協力隊の候補者を迎えるのは、にほんまつ地球市民の会。協力隊を目指す若者たちを支えようと市民が立ち上げた団体だ

# 復興を支える



二本松訓練所では、地域の人を対象に料理を通して世界を学ぶイベントを開催している

は、「協力隊の活動から戻ってきたら、そこで得た力を今度は福島でも発揮してほしい」と期待を込める。  
**協力隊の経験を  
福島で生かす**

その言葉に応えるように、二本松訓練所から巣立った協力隊員の中には、活動後に福島県に戻り、復興に携わっている人も多い。09年からチュニジアで作業療法士として活動した清山真琴さんもその一人だ。

清山さんは「体に障害のある子どもたちを元気にしたい」と現地に向かったものの、そこには日本の常識とは全く違う現実があった。「障害のある子は安静にさせておくのが一番」と言われ、リハビリ室さえなかったのだ。しかし、毎日足の曲げ伸ばしなどのリハビリを地道に続けたところ、車いすの女の子が徐々に歩けるようになった。やっと同僚たちの理解が深まってきたところだったが、中東地域で「アラブの春」が発生。治安悪化のため、いったん日本に戻ることに決まった。

その間に起こったのが東日本大震災だ。清山さんをはじめ一時帰国中の隊員に声がかかり、避難所となった二本松訓練所で2週間、

ボランティアとして活動することに。福島の人々は我慢強く控えて、「私はいいから向こうの人を助けてあげて」と言われてばかりだった。しかし、活動が思うようにいかないのは隊員時代に経験済み。清山さんは毎日避難所内を回り、被災者の話し相手になることで信頼関係を築き、不安や悩みを打ち明けてもらえるようになって少しずつニーズを見付けることができた。

これからの福島のためにできることをしたい。その思いから、再派遣を経て帰国後、清山さんは復興庁の職員として南相馬市に赴任。特に作業療法士として心配しているのは、未来を担う子どもたちだ。原発事故の影響により外で遊ばせるのをためらう保護者も多いため、室内でできる遊びを通して体力の向上を目指している。

「私は宮崎出身なので、インターンしたんだね」とよく言われます。でも、協力隊に行ったらこそ思うようになったのは、私はどこかの県出身ではなく、日本出身。だから今、福島のためにできることをしたいのです。

そう笑顔を見せてくれた清山さんのように、福島を元気にする青年海外協力隊として、協力隊経験者たちは復興庁や福島市役所、NGOの職員として活動したり、毎月訪問してボランティア活動をしたり、福島の復興に奔走している。自分でできることで、もう一度、第二のふるさとが笑顔であふれるように。



チュニジアで活動した作業療法士の清山さんは南相馬市に移住し、子どもたちの体力強化に奮闘中。「味方はいるよと福島の人々に伝えたい」



[右] 訓練期間中には、農家や幼稚園などでお手伝いし、地域の人々と交流する  
[左] 現地の言語をみっちり学び、住民へのアンケート方法といったスキルも身に付ける



出張講座で訪れた高校から届いた感想文。「エイズのことがかかった」「フェアトレード商品を買ってみたい」と紙いっぱい書かれている



## 世界とつながる 教室

# 女子高生が伝える 世界の課題

地元の子どもたちに、HIV/エイズで苦しむ人たちのことを伝えたい—。松江市立女子高等学校は約20年、生徒会のメンバーを中心に出張講座などを通じて普及活動をしている。



質問タイムに「フェアトレード商品はどこで買えるんですか?」と聞く小学生

### 市内の小学生とエイズについて考える

ちらちらと雪が降り始めた12月初旬の昼下がり。島根県の松江市立母衣小学校に、制服姿の女子高生6人がやってきた。松江市立女子高等学校の生徒会執行部のメンバーだ。いつもと違う先生たちに、今から何が始まるのだろうと、6年生が大きく目を見開いて待っている。

彼女たちの目的は、HIV/エイズについて伝えること。この日のために台本をつくり、リハーサルをして、何カ月も準備してきた。限られた時間の中でいかに子どもたちの心に響く話ができるか、腕の見せどころだ。

「エイズって聞いたことがありますか?」

体育館に集まった約80人に向かってそう切り出したのは、2年生の石川涼子さん。石川さんたちは、HIV/エイズに関する基礎知識や感染ルート、予防方法などについて、小学生にも分かりやすい言葉で説明できるように勉強を続けてきた。

「開発途上国といわれる国々では、皆さんと同じくらいの年齢の子どもたちがエイズに感染し、亡くなっています。お金がないためにご飯を十分に食べられず、学校にも行けず、その代わりに

働かなくてはならない子もいるんですよ」。今初めて小学生向けの講座を体験した1年生の福代沙希さんは、少し緊張しながらも、世界の子どもたちの過酷な状況を懸命に伝えている。「子どもなのに働かないといけないなんてひどい」「苦しいことばかりかわいそう」。あちこちからそんな声が聞こえてきた。

### 青年海外協力隊員の話に心を動かされて

授業の後半は、クイズコーナーだ。「日本にいても、途上国の子どもたちを助けられる方法があります。このマークを知っていますか?」

手にしているのは、フェアトレード商品を表すマークだ。「あ、見たことある!」と元気な声。そのマークがついた商品を買うことで、途上国の生産者たちをサポートできる。しかも、近所のスーパーや百貨店で買えることを知った子どもたちは、「お母さんに話してみよう!」「今度絶対買う!」と目を輝かせていた。

授業終了後、子どもたちに握手を求められた高校生たち。「準備は大変だったけど、伝えられた」という実感が持てました。もっと勉強して、もっとたくさんの人に伝えたい」と口をそろえて話してくれた。生徒会のこうし

た出張講座は、年に10回程度、地元の小学校だけでなく中学や高校にも広がり、もう20年近く続いている。きっかけは、1996年に松江市が文部科学省のエイズ教育推進地域事業の指定を受けたこと。同校はルーミアアのエイズ孤児への募金などに始まり、地元の学校へのエイズ教育の普及に活動を広げていった。そうした長年の活動の成果が認められ、2014年10月には、女性の可能性を広げる取り組みを行う団体や個人に贈られる「津田梅子賞」を受賞した。JICAの出身講座を活用して協力隊経験者の体験談を聞いたり、世界の実情や日本の現状について広く学習する合宿型の研修を開いたり、国際協力を積極的だ。授業はもちろん、文化祭や体育祭、その他さまざまな学校行事の中核となり、何かと忙しい生徒会のメンバー。それでもその時間を縫って、自主的に活動が続いてきたのはなぜか。「マダガスカルでエイズ教育に取り組んでいた青年海外協力隊員の方の話を聞いて、自分にもできることをしたいと思っただけです」と、2年生の引野恵里花さんは話してくれた。

「生徒会に入ってから、世界には本当に深刻な問題があると知りました。いつか途上国に行って自分の目で確かめてみたい」「将来はJICAで働いたら看護学校に進学して、世界の医療現場で働きたい」と、将来の夢を語る生徒会のメンバーたち。彼らが島根で続けてきた地道な取り組みが、世界を変える力となるだろう。



「島根県には何人のエイズ患者がいると思う?」。高校生の質問に、手を挙げて次々と答える小学生たち



[右]生徒会室での会議の様子。出張講座などでとっさの質問が来てもいいように議論を重ねる  
[左]世界の実情や日本の現状について学習する年1回の合宿型のリーダー研修が、日々の活動の基礎になっている

### 開発途上国と日本の幸せのために、 協力隊の可能性を広げたい

民間企業との連携など、JICAボランティアの可能性を広げる制度を次々と生み出してきた青年海外協力隊事務局。その立役者として活躍するのが、企業でのマーケティングと協力隊時代の経験を生かして働く永野りささんだ。

#### パナマで知った ゼロから形にする面白さ

海外で暮らす面白さや難しさを初めて体感したのは中学3年生の時。カナダでホームステイをして「もっといろいろな世界を見たい」と思いました。大学時代はタイのワークキャンプで山岳民族の生活を体験し、物が限られていても心豊かに生きる人々の姿に心を動かされました。

卒業後は、ベビー用品メーカーに就職。営業とマーケティングを担当し、商品を通じて子育てに貢献できることにとてもやりがいを感じていましたが、「国際協力の現場で働きたい」という思いがずっと心に残っていました。約3年で会社勤めはいったん区切りをつけ、より深く現地の人と関わり、同じ目線で考えることのできる国際協力に携わりたくて、たどり着いたのが青年海外協力隊でした。

派遣されたパナマでは移動図書館に配属され、地域の子どもたちに利用してもらえようというプロモーション活動をしました。最初は価値観や文化の違いから、現地スタッフとのコミュニケーションが思うようにならず戸惑うこともありましたが、物事をゼロから形にしていく活動にやりがいを感じました。

#### 帰国後に見つけた 協力隊という、商品、を売る仕事

現地の人々の役に立てるよう、協力隊員が



全力で奮闘する姿は十人十色。それぞれに、ドラマになるようなストーリーがあります。次の進路を考えたい時、前職のマーケティングの経験を生かして、自分が体験した協力隊という、商品、を世に広めていきたいと思うようになりました。そうして出会ったのが、今の仕事です。

JICAボランティアの広報を通じて、この事業の魅力はどうしたらより多くの人に伝えることができるか。手前味噌ではなく、協力隊の存在意義をもっと理解してもらえようようにしなければと強く感じました。そこで考えたのが、協力隊経験者を採用した企業や、活動を視察したことのある著名人などに意義を語ってもらうウェブ企画「サポーター宣言」です。協力隊事業を客観的に評価してもらえる仕組みとして、より多くの方から共感を得られるようになり、うれしく思っています。

また、民間企業などの社員をJICAボランティアとして派遣する「民間連携ボランティア制度」の創設にも携わりました。これは開発途上国の課題解決に貢献するだけでなく、帰国後には企業の即戦力となつて活躍できる人材を輩出する制度。企業訪問や説明会の開催などを通じて多方面に働きかけ、軌道に乗るまでは休む間もなく必死でした。一社、二社と共感していただけの企業も増え、グローバル人材の育成にもつながるものと実感し始めています。



協力隊時代、日本文化の紹介の一環で折り紙を取り入れたこともある

#### 協力隊節目の年に考える 次の50年

2015年は協力隊50周年。次の50年を見据えて、協力隊の可能性をあらためて探る絶好の機会です。この記念すべき節目の年に、この仕事に携わっていることを幸せに思います。

協力隊事業は、国民の皆さんの理解があつて初めて成り立つもの。海外とつながるだけが国際協力ではなく、国内の多方面の人々と連携してこそできる協力があります。これからもより多くの人にもっと協力隊の魅力が伝わるよう、その橋渡しをしていきたいと思っています。



JICAボランティアのイベントで、協力隊を目指す若者たち一人一人の相談にじっくりと乗る永野さん

国際協力60周年記念シンポジウムを開催

01



パネルディスカッションでは、途上国の未来について活発な議論が展開された

2014年は、日本が国際協力を開始して60年の節目の年。11月17日、それを記念したシンポジウム「成長と貧困削減―日本のODAに期待される役割」が東京で開催されました。

第一部では、岸田文雄外務大臣と国連開発計画（UNDP）のヘレン・クラーク総裁が基調講演。外務省が2014年3月にODA大綱の見直しを発表したことを受けて、岸田外務大臣は「日本も、日本を取り巻く環境も大きく変化しているので、ODAも進化を遂げなければ」と強調しました。

第二部は、NHKの道傳愛子解説委員をモデレーターに、「日本の国際協力と期待される役割」をテーマにしたパネルディスカッションが行われました。パネリストとして参加したのはフイリピン人のデル・ロサリオ外務大臣、ケニアのマイケル・カマウ運輸・インフラ省長官、ブルッキングス研究所のジョン・ペイジシニアフェロー、田中明彦JICA理事長。田中理事長は日



「相手国の立場に立つのが日本の国際協力の特徴」と語る田中理事長

本の国際協力の歴史を振り返り、「インフラ整備や農業支援の分野から、保健・衛生、教育、平和構築などの割合が大きくなってきている。一村一品運動やカイゼンといった日本ならではの協力を、相手国の立場に立つて行うのが重要」と語りました。

パネリストの一人、ケニアのカマウ長官は、「日本のODAはアフリカに成長できるというモチベーションを与えてくれた」と言及。ブルッキングス研究所のペイジ・シニアフェローも、アジアでの日本の経験をどう開発に生かすか分析し、「必要なのは、その国の人々自身が戦略、スキル、知識を持つこと。これはまさに日本の国際協力が得意とするもの。日本がアフリカ援助のリーダーになることを期待している」と語りました。

最後にパネリストが、会場からの質問に答えながら意見交換。60年を振り返り、今後の日本の国際協力の在り方を考える貴重な機会となりました。

ケニア長官と元協力隊員が40数年ぶりに再会

02



「これは私の母親ですね!」。カマウ長官(中央)は当時の写真を見て笑顔に

「国際協力で大切なのは、人と人の心に橋を懸けること」と話すのは、ケニア運輸・インフラ省のマイケル・カマウ長官。国際協力60周年記念シンポジウムにアフリカ代表として出席するために来日した際、40数年前にケニアで活動した青年海外協力隊員、千々岩宗貞さんと今野充さんと再会を果たしました。

2人は自動車整備の隊員として、ケニア中央部の町ニエリの林野庁営林署に配属。そこにカマウ長官の父親が勤めており、当時小学生だったカマウ長官は協力隊員との交流を覚えていたのです。

当時の写真を見ながら昔話に花を咲かせ、カマウ長官は「再会できたのは奇跡」と喜びを語りました。千々岩さんと今野さんも「あの時の子どもが立派になって驚くことに驚いた。覚えてくれていてうれしい」と話し、時を超えた感動の再会になりました。

田中理事長がワシントンDCを訪問

03



パネルディスカッションに参加した田中理事長(右端)

12月3日、田中明彦JICA理事長は米ワシントンDCでシンポジウムに出席しました。これはジョージタウン大学などが共催する「女性・平和・安全保障に関する国別行動計画」に関するアカデミーの設立に合わせて開催されたものです。

国連安全保障理事会では、紛争下の女性をめぐる課題に焦点を当て、各国は行動計画の策定を進めています。シンポジウムの冒頭では、ヒラリー・クリントン元米国国務長官が基調講演を行い、女性が平和構築プロセスに参画する重要性について論じました。

パネルディスカッションでは、田中理事長がパネリストの一人として登壇。安倍晋三内閣総理大臣のイニシアチブで行動計画の策定を進めていることや、この分野に関連するJICAのフイリピン・ミンダナオの平和構築支援などについて紹介しました。

<Profile>

さいとう・とみお

1945年兵庫県出身。関西大学卒業。96年に兵庫県の危機管理全般を統括する初代の防災監に就任。阪神・淡路大震災の教訓を生かした防災対策の充実を図るとともに、ロシアタンカー重油流出事故、新型インフルエンザなど多くの緊急事態を指揮。2001~09年まで兵庫県副知事。

BOKOMIの一環として、小中学生が中心になって活動するジュニアチームもある



途上国でも同じではないだろうか。ましてや、救援体制が十分でない途上国ほど、住民の力をどのように育てるか、つまり防災教育の普及、自分自身を守る力をどう身に付けるかが大切だ。だからこそ、私たちのノウハウを共有していければと思うている。

言うまでもなく、自然災害への対応は、一国、一地域の問題ではない。



県内で日本防災用生きた言葉が学べる授業など、必要に応じて活用

国際社会全体で取り組むべき課題だ。その点において、私たちは被災体験を持つ地方自治体の一員として、自身が歩んできた20年を、世界に発信していく責務を担っている。しかし草の根で住民たちと協働するノウハウはあるが、海外で活動するノウハウはない。そこでパートナーとなっているのがJICAだ。20年たったが、まだ私たちがやるべきことはたくさんある。

る組織である。

しかし、組織はつくるのが目的であってはならない。どのように活動を展開し、維持していくか。住民の力を最大限に引き出せる方法を考えるのは行政の仕事だ。自治会ごとに、スコープやはしご、のこぎりなどの備蓄倉庫を設置する。訓練の機会も提供する。住民たちもその中で備えを重ねていくのだ。

2014年11月22日に長野県北部で起こった地震では、住民の力が大いに発揮された。倒壊した住宅に取り残された人を住民たちが協力して救助し、1人の死者も出さなかったのだ。それは、住民が自身の手で地域を守る力があるということを示した。都市部では個人情報問題もあって難しい一面もあるが、数々の災害を経て、日本人の意識は変わりつつあるように感じる。

さらに、県内の外国人に対して、地域のNGOやボランティアなどに協力してもらい、どの地域でもすき間なく、日本語教室が開催されるよう取り組みを進めている。私どもの国際交流協会が作成した「家族を守る10のポイント!」の各国語訳で防災の知識を学び、また、日本語教室に参加することで地域の人とつながりが生まれ、協働体制が強化されることも期待している。

# Voice

16

## 災い転じて福となす

公益財団法人兵庫県国際交流協会理事長

齋藤 富雄

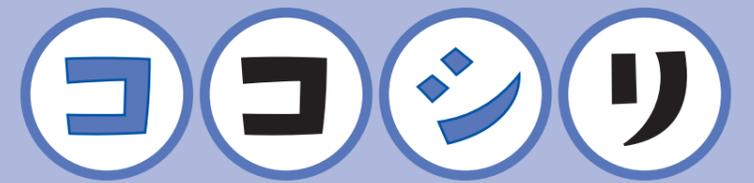


阪神・淡路大震災の時に来日した海外の救助チーム。救助犬が日本の国際緊急援助隊に取り入れられるきっかけにもなった

1995年1月17日は、決して忘れられない日だ。阪神・淡路大震災が起こってから20年がたった。一言で表すと、本当に早かった。兵庫県民にとっては、「追われた20年」と言っても過言ではないだろう。淡路島北部沖を震源とした大地震は、早朝に県都の中心部を襲った。こんなに大きい地震がこの街に来るなど、私たちは思ってもみなかった。当時の意識調査では、その可能性を想定していたのは住民のわずか8%。経験したことがない規模の地震を前に、私たちはさまざまな困難にぶち当たった。

い非難が各地から寄せられた。「被災地はおごっているのではないか」「今は猫の手も借りたくないのに」と。そこで私たちは政府と話し合いをし、なんとか受け入れにこぎつけた。怒涛の2日間だった。海外からやってきた人々は、懸命に救助活動を行ってくれた。その姿を県民たちは、その目で見ていた。救われた命はもとより、「私たちは一人じゃない」と勇気を与えてくれた。そして、誰もが思ったのだ。「世界中どこの国の人たちにも、この悔しさ、悲しさを味わってほしくない」。

開発途上国から受け入れるなど、復興の中で国際協力が文化として根付きつつある。まさに「災い転じて福となす」である。災害の規模が大きければ大きいほど、行政の力は及ばなくなる。そうなった時に、自分の命を守るのは自分、そして地域の人々との連帯だ。神戸市内では震災後の16分間で、約60件の火災が起きた。いくら消防が優秀でも、即座に消火活動に対応できるのは10件くらいだ。自分たちの地域は自分たちで守らなければならぬ。その教訓を得た私たちは、復興のプロセスとして住民活動の組織化を入れた。もしもの備えのため、そして何かあった時に共に活動し、命を救い合うためだ。自主防災組織(自主防)、防災福祉コミュニティ(BOKOMI)などといわれ



「ココが知りたい」。国際協力に関係する  
 いろんなトピックを分かりやすく解説します!

11 月12日、ミャンマーの首都ネーピドーで「第17回日・ASEAN首脳会議」が行われ、安倍晋三内閣総理大臣が出席しました。冒頭に安倍総理は、2013年12月の日・ASEAN特別首脳会議で採択された「日・ASEAN友好協力に関するビジョン・ステートメント」と「共同声明」を着実に実施に移し、さらに協力を深めていきたいと述べました。

同ステートメントの柱は、①平和と安定のためのパートナー、②繁栄のためのパートナー、③より良い暮らしのためのパートナー、④心と心のパートナーの4つ。安倍総理は①について、安保法制整備についての閣議決定、日・米防衛協力のための指針の見直しなど、国際協調主義に基づき「積極的平和主義」の取り組みについて説明。②に関しては、アジアにおける膨大なインフラ需要に適切に対応し質の高い成長を実現するためには、「人間中心の投資」の推進が不可欠であるとしました。また、③はASEANにおけるユニバーサル・ヘルズ・カバレッジ(UHC)達成のための「日・ASEAN健康イニシアチブ」の推進、④は青少年の交流といったキーワードを強調しました。

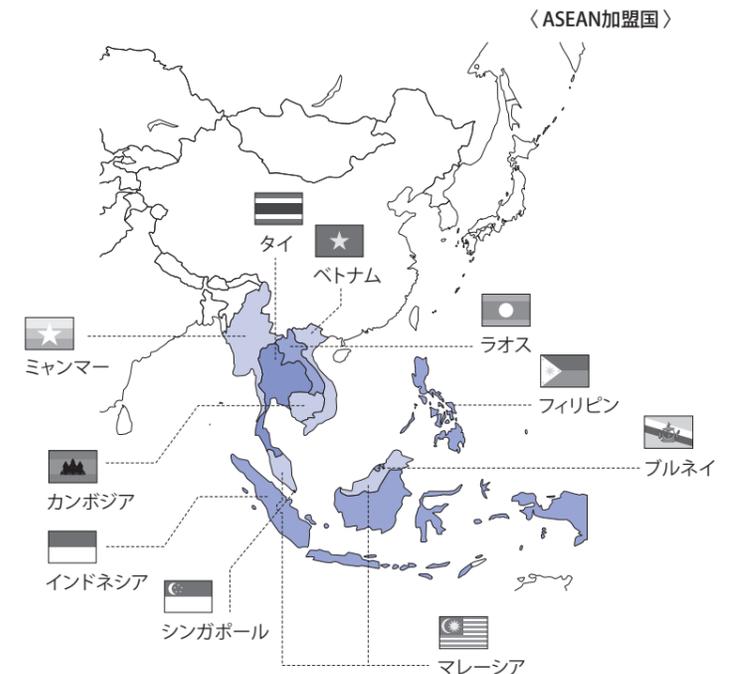
ASEAN側からは、日・ASEAN関係が2013年の特別首脳会議を経て新たな高みへと引き上げられたことを高く評価するとともに、政府開発援助(ODA)、日・ASEAN統合基金(JAIE)、連結性支援プロジェクトなどを通じた日本の協力に深く感謝するとしました。また、今回新たに採択されたのが「テロ及び国境を越える犯罪との闘いにおける協力のための日・ASEAN共同宣言」。安倍総理は、西アフリカを中心に拡大しているエボラ出血熱の流行、ISIL(イラク・レバントのイスラム国)などに関して、日・ASEANで緊密に協力を



ミャンマーに一堂に会した安倍総理とASEAN各国の首脳陣  
 (提供：内閣広報室)

「第17回日・ASEAN首脳会議」  
**地域の発展に向けて  
 アジアの力を一つに**

11月、ミャンマーに日本と東南アジア諸国連合(ASEAN)各国の首脳が集結。地域内の課題や解決に向けた連携についての議論が行われました。



アジアの「最後のフロンティア」として知られるミャンマーで各国の首脳が議論



「これからもASEAN諸国との連結性を高めていきたい」と安倍総理  
 (提供：内閣広報室)



東京に一堂に会したカリコム諸国の外相ら



「安保理改革実現のため、緊密に連携していきたい」と岸田文雄外務大臣

**カリコム加盟国・地域**

アンティグア・バーブーダ、バハマ、バルバドス、ベリーズ、ドミニカ国、グレナダ、ガイアナ、ハイチ、ジャマイカ、セントクリストファー・ネイビス、セントルシア、セントビンセント及びグレナディーン諸島、スリナム、トリニダード・トバゴ、モンセラット(英領)

11 月14と15日、東京で「第4回日・カリコム外相会合」が開催されました。この会合は、カリブ海を囲む14カ国、1地域から成るカリブ共同体(カリコム) 諸国の外相などを東京に招き、国際社会における日本の協力姿勢や日・カリコム関係の在り方などについて議論するものです。

「第4回日・カリコム外相会合」  
**日・カリブ交流年への期待**

の拡大と深化、③国際社会の諸課題の解決に向けた協力が表明されました。今回の会合でも、この3つを柱に今後の関係強化を行っていくことが、あらためて確認されました。カリコム諸国は、小島しょ開発途上国特有のぜい弱性克服に向けた日本の協力を高く評価しました。一方で、「ミレニアム開発目標(MDGs)」を継ぐ「ポスト2015年開発アジェンダ」の議論や、開発のための資金調達において、所得水準のみならずカリコム諸国の持つぜい弱性にもっと目を向けてほしいという、カリコムの声を日本が代弁することに高い期待が表されました。

国際会議

国際会議

*Message from Kyrgyz*  
**日本の強みを生かした農業協力**



種まき機を使ってニンジン(ニンジンの)の種まきをする



日本人専門家からカボチャの種取りについて説明を受ける

日本はキルギスに対する支援の大きな柱の一つとして、農業に力を入れています。キルギスは、山岳地域からの豊富な融雪水、雨が少なく乾燥した気候など野菜種子生産に適した自然環境がそろっており、協力分野は、野菜栽培、酪農、農業機械、農家の組織強化と多岐にわたります。

日本の農業開発において、稲や小麦は公的機関により品種改良が行われてきましたが、野菜種子の品種改良は民間企業が主導し、民間の方が得意な分野です。そこでキルギスで実施中の「輸出のための野菜種子生産振興プロジェクト」では、一般社団法人日本種苗協会を通じて、今

JICAキルギス事務所

大西啓一郎 企画調査員

現地からのメッセージは、ODAメールマガジン(www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/mail/)でご覧いただけます。

# Benin

[ベナン]

写真・文＝飯塚明夫(写真家、青年海外協力隊OB)

ベナンの伝統宗教の一つ、ボードウンの祭りの日に、ウィダの街中を練り歩くエグン。そのそばを、バイクに乗った親子が通り過ぎた



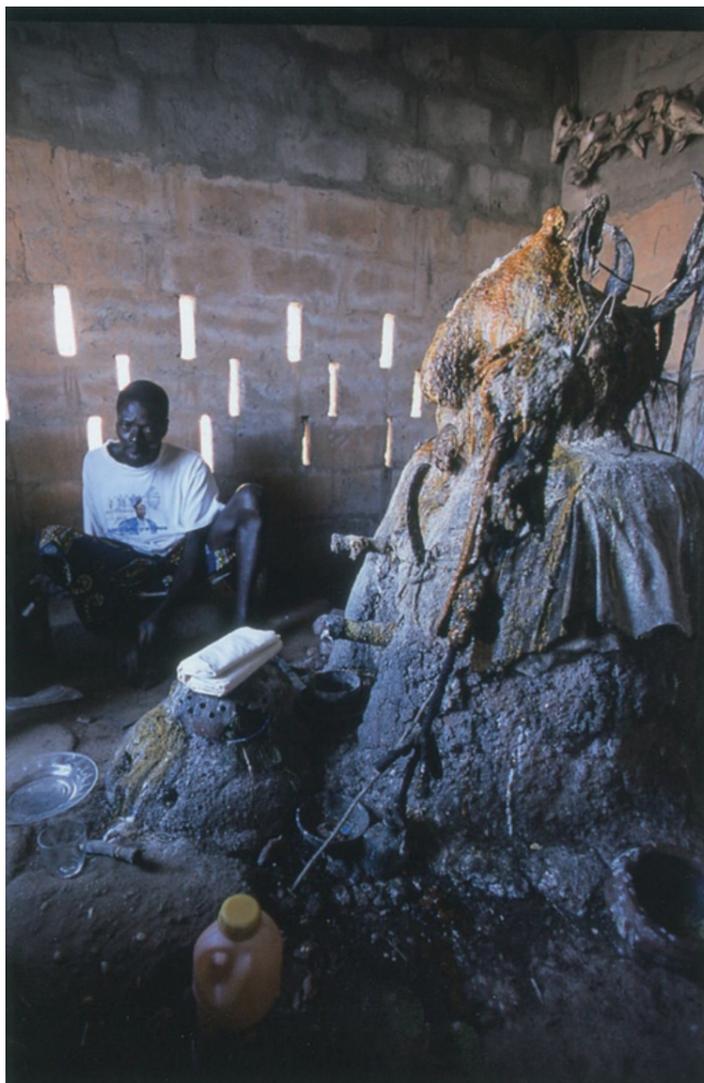
# ボードウンのカ



ウイダの飲食店で見かけた人魚姫。その姿の原型はボードウンの神の一人といわれている

地球ギャラリー vol.76

ボードウンの神々の中で一番人気のある“太陽神レグバ”と祈禱師。レグバは人と神の世界を行き来することができ、信者の願いや悩みを神々に伝えることができるといわれている



西アフリカのベナンを訪ねた。この国に多く住む民族の一つ、フォンの人々が信仰する伝統宗教「ボードウン」を取材するためだ。創造神リサ・マウを頂点に、太陽神、鉄と火の神、万物の誕生を司る神など、数百の神々がその下に連なる。私がボードウンに関心を持ったのは、西アフリカに吹き荒れた奴隷狩りに関連があるからだ。16〜19世紀にかけて、数100万もの黒人がカリブ海やアメリカ、ブ

ラジルなどに奴隷として、出荷された。ベナンも例外ではない。奴隷狩りによる人口減少と家族を拉致された人々の悲しみは、この地域に深刻な傷跡を残した。その傷を癒やしてくれたのが、彼らの生活に根差したボードウンだったのではないだろうか。今日でも人々はボードウンの祈禱所を訪ね、日常生活で生じる悩み事を相談し、豊作や商売繁盛などを祈願する。

また18世紀ごろ、カリブ海に浮かぶ国ハイチの黒人奴隷は、自分たちの尊厳と生きる力を見いだすために、ボードウン教を生み出した。その母体となったのが、ボードウンだそう。1992年にボードウンはベナンの国教となり、毎年1月には信仰の中心地ウイダで大きな祭りが行われる。街中を色彩豊かな衣装をまとって練り歩くエグンは、よみがえった祖先の姿といわれる。



ボードウンの祈禱所で踊る“蛇の精霊”にふんした少年



さまざまな踊りで人々を楽しませ、非日常の世界をつくり出すエグン



祭りを見物する人々。後ろには奴隷船に積み込まれる黒人たちの姿を描いたモニュメントが見える



小枝の下に集まってくる魚を網で囲い捕まえるガンビエの漁師たち



水上集落ガンビエでは、高床式住居のそばを小舟が行き交っている



村の給水所に水を買に来た女性たち。水50リットルで10円ほどだ

奴隷狩りを逃れた人々がつくったというノコエ湖上の集落、ガンビエに向かった。  
 村の人口は約4万人、アフリカ最大ともいわれる水上集落だ。村に住むのは主にアジヤ民族の人々。フォンの近縁で、彼らもボードゥンを信仰している。  
 大きな水路に沿って、くいで支えられた高床式住居が並ぶ。学校や集会所、商店やガソリンスタンド、給水所など生活に必要な施設が湖上にはそろっている。夕方になると水路の交差点は、野菜や調味料、まきなどを積んだ船が集まり、たちまち水上市場に様変わりする。

古老の話によると、ガンビエの創始者は、アジヤイ・フィネだという。18世紀ごろ、奴隷狩りから逃れるためアジヤイとその仲間たちは、故郷アジヤ・タドゥを旅立った。しかしアボメ・カラビで、湖に行く手をはばまれた。  
 困ったアジヤイはボードゥンの呪術の力を借り、ワシとワニを呼び寄せた。彼らはワニの背中に乗り、ワシの案内で無事に今のガンビエの地にたどり着くことができた。  
 それからは漁をしながら、平穩に暮らしてきた人々。その時間は今もなお、確かにこの土地に流れ続けていた。

サハラ砂漠から飛来した砂が舞う早朝のノコエ湖。数々の小舟がガンビエから街の港に向かう



地球ギャラリー vol.76



夕方の水上市場。売り手の女性たちの声が飛び交い、活気がある



湖上の学校。教室が1つしかないのので、複数の学級が合同で学んでいる



漁師が捕った魚を市場で売る女性

注目されている  
教育といえば

日本語



日本との交流の拠点となるよう、ベナン初の日本語学校として建設された「たけし日本語学校」では約120人の生徒が学んでいる

日本から約1万3,000キロ以上もある西アフリカのベナン。そんな遠く離れた地で、10年前からなんと日本語教育が熱い！

なぜベナンで日本語なのだろうか。この国では、日常生活で目にする車や電化製品が「MADE IN JAPAN」であることも少なくない。しかし、アフリカ大陸が中心に描かれた世界地図では、日本は一番右端にある小さな島。どんな国で、どんな人々が暮らしているのか、そしてなぜ経済大国になったのか。そんな“不思議の国”について伝えたいと、2003年にゾマホン・ルフィン駐日ベナン共和国特命全権大使が開校した「たけし日本語学校」が今、現地の人々に人気なのだ。

どんな人でも学べるように授業料は無料。現在、入学希望者は数千人に上る。ここで学んだ生徒のうち、これまで延べ30人以上が日本への留学の夢をかなえている。同校では、公用語のフランス語ではなく、現地語のフォン語で日本語を学べるCD教材を制作。日本語を通して、ベナンと日本のつながりを深めている。



フォン語で日本語を学べるCD教材は西アフリカ初といわれる

地球ギャラリー

ベナンの文化を知ろう！

取材協力：NPO法人IFE

ベナンの夕暮れ。村ではあちこちの家で夕飯の支度が始まっている。ガスが通っていない家では、まきの上に大きな丸い鍋をかけて、今日のおかずをぐつぐつと煮込んでいる。まきを燃やすにおいととも、香ばしいピーナツソースや酸味のあるトマトソースの香りがだんだん漂ってくる。

その隣では、きねと臼を使って2人でベッタン、ベッタンと何かをついている。これがこの国でよく食べられている主食の一つ、アグンだ。ゆでたヤムイモを、お餅つきのようにして作るもの。ヤムイモは腹持ちがよく、手のひらサイズだけでおなかいっぱいになる。

アグンを手で一口サイズに取り、ソースを絡めて食べるのがベナンスタイル。特に合うのが、ニンニクのきいたピーナツソース「アジンスヌ」だ。鶏肉などを入れれば立派なおかずになる。

お母さんたちが料理を作っている脇では、子どもたちの笑い声が絶えない。ベナンの夕暮れ時は幸せにあふれている。

ベナン料理といえば  
ピーナツソースがアクセント

鶏肉のアジンスヌがけ



【RECIPE】

●材料(5人前)

ピーナツペースト300g  
／トマトペースト300g  
／鶏肉500g／タマネギ1個／ニンニク4～5個／ローリエ2枚／塩コショウ少々／油適量／水500cc

- 1 鶏肉を食べやすい大きさに切り、すりおろしたニンニク、塩コショウ、ローリエで味付けして10～15分置く。
- 2 ①の鶏肉を10分ほど焼き、パリパリにするため最後に揚げてから取り出しておく。
- 3 鍋を中火にかけ、すりおろしたニンニクを炒める。すりおろしたタマネギを加え、水分が少なくなったらトマトペースト、塩少々、ローリエを入れ、ふたをして煮込む。
- 4 ③の水分がなくなったら、水、ピーナツペースト、②の鶏肉を肉汁ごと入れ、火にかけてひと煮立ちしたら出来上がり。



ヤムイモをつぶしたりと生活に欠かせない長いきねと臼

# イチオシ!

## M OVIE

### 『トラッシュ! -この街が輝く日まで-』

ブラジル最大の都市、リオデジャネイロ。その郊外で、世間から見放されゴミを拾って生きる3人の少年が、ある日、一つの財布を拾う。入っていたのは、お金、ID、少女の写真、コインロッカーのカギなど。警察が執念深く財布の行方を追っていることから、重大な秘密が隠されていると気付いた3人は、少しずつ真実に迫っていく。絶望の街で見つけた小さな希望とは一。主人公には実際にスラムに暮らす無名の少年たちを起用し、たくましく生きる力を見せつけられる。



© Universal Pictures

2014年/ブラジル・イギリス/114分  
 監督：スティーヴン・ダルドリー  
 出演：マーティン・シーン、ルーニー・マラ、ワグネル・モウラ他  
 公開：1月9日(金)よりTOHOシネマズみゆき座(東京)他 全国公開  
 URL: trashmovie.jp/  
 配給：東宝東和

## E VENT

### 『ワン・ワールド・フェスティバル』

関西を中心に活動するNGOを中心に、政府機関、国際機関、教育機関、自治体、企業などが参加する西日本最大級の国際協力・交流のイベント。各団体の活動を紹介するブースの他、ワークショップやセミナーなどの企画が盛りだくさん。JICAもブースで活動紹介をする他、「なんとかしなきゃ!プロジェクト」では、ボビー・オロゴンさんと藤岡みなみさんのトークショーや、医師の桑山紀彦さんが国際協力60年の歴史を歌と映像で伝える「地球のステージ」などを展開する。各国の料理も味わえ、楽しみながら世界について学べる2日間だ。

会期：2月7日(土)、8日(日) 10~17時  
 会場：関テレ扇町スクエア、北区民センター、扇町公園(大阪)  
 問：ワン・ワールド・フェスティバル実行委員会事務局  
 TEL：06-6944-0407  
 URL：www.interpeople.or.jp/owf/

## B OOK

### 『元JICA専門家 中小企業診断士 298日間の海外支援奮闘記』

大手事務機器メーカーの技術者だった著者は、財務や経営などを学んで幅広い視野を持ちたいと、中小企業診断士の資格を取り、独立。これまで11の開発途上国で、地元の中小企業のレベルアップに向け、カイゼンや5Sといった日本の企業精神を伝えてきた。その一つ、カメルーンへの赴任は、やっとつかんだ国際協力のチャンス。本書では、「成果を残せるか?」と不安を抱きつつ、旅行会社から自動車修理会社、パン屋さんまでを相手に奮闘した“ママさん”の298日間が綴られている。



吉村守 著  
 同友館  
 1,728円(税込)

この本を  
 1人の方に  
 プレゼント  
 詳細は  
 38ページへ

## B OOK

### 『ジャスミンの残り香 —「アラブの春」が変えたもの』

2011年、チュニジアの青年の焼身自殺をきっかけに中東地域で広がった「アラブの春」。民主化を求める人々が立ち上がり、エジプトやリビア、イエメンなどでは当時の政権を倒すまでに発展した。しかしそれからというもの、どこもかしこもいまだ混乱の中。シリアやパレスチナでは、出口が見えない戦闘で犠牲者が増え続けている。あの革命は徒勞だったのか。30年近くアラブ世界を取材し続けている著者が、現地の人々にこの問いをぶつけ、答えを探し続ける。



田原牧 著  
 集英社  
 1,620円(税込)

この本を  
 1人の方に  
 プレゼント  
 詳細は  
 38ページへ

2015年が幕を開けました。今年は「ミレニアム開発目標(MDGs)」の達成目標年です。2000年、国際社会は世界から貧困をなくすための共通目標を立て、その期限を15年後に決めました。飢餓撲滅や教育の普及、保健・衛生サービスの向上、ジェンダー平等などの8つの目標は、大きく取り組みが進んだものがある一方で、課題も残っています。

今年の秋には、国連総会で新たな開発目標が採択されます。JICAはこれまで蓄積してきた知見やネットワークを生かして、今後も日本ならではのきめの細かい、かつダイナミックな協力を行っていききたいと思っています。

また、今年「青年海外協力隊50周年」の節目の年でもあります。まだ1ドル360円の固定レートで海外旅行も珍しかった時代に、ラオスに5人の青年海外協力隊員が派遣されたのが始まり。これまで累計で世界96カ国に約4万7000人のJICAボランティアが派遣され、世界の津々浦々で活動する姿が最近よくテレビにも登場しています。

この50年、協力隊を含むJICAボランティア事業はシニア層への派遣拡大、企業や大学のグローバル人材育成のニーズに応える制度づくりなど、社会の変化と連動して進化を続けています。でも変わらず中核にあるのは、現地の人々に寄り添い、同じ目線で共に課題に取り組み姿勢です。また活動を通して、勤勉さ、丁寧さといった、日本人らしさを相手国の人々に伝え続けています。

先日来日したケニアの運輸・インフラ省長官から「子どもたちの父親の職場で会った2人の協力隊員に会えないか」と相談があり、40年以上の時を経て再会が実現しました。その時の長官の言葉「さまざまな国際協力があるが、大切なのは人と人との心に橋を懸けること」は、協力隊の本質を表しています。

広報室長 西野恭子

本誌へのご意見・ご感想や  
JICAへのご質問を  
お寄せください。

プレゼント  
付き

添付のアンケートはがき、Eメール、FAXから、本誌に対するご意見やご感想、またJICAへのご質問を、氏名・住所・電話番号・職業・年齢・性別・ご希望のプレゼントを明記の上、お送りください。ご記入いただいた個人情報統計処理およびプレゼント発送以外の目的で使用いたしません。当選者の発表は発送をもってかえさせていただきます。

◎応募締切：2015年2月15日

Eメール：jica@idj.co.jp  
FAX：03-3221-5584(『mundi』編集部宛)

- ① ケニアのサイザルバスケット
- ② 書籍『ジャスミンの残り香 —「アラブの春」が変えたもの』(p37参照)
- ③ 書籍『元JICA専門家 中小企業診断士 298日間の海外支援奮闘記』(p37参照)



①



②



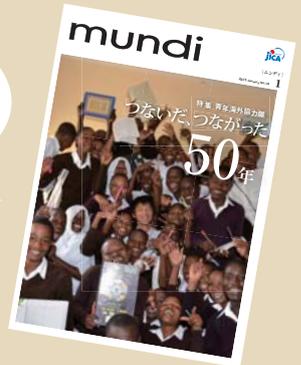
③

本誌をご希望の場合は  
下記方法で  
お申し込みください。

申込方法

本誌をご希望の方には、送料をご負担いただく形でご送付いたします。巻末の払込取扱票に、氏名・住所・電話番号・ご希望の送付期間・送付開始月を明記の上、指定の金額を郵便局でお支払いください。入金確認後、発送手配をいたします(入金から1週間程度かかることもありますのでご了承ください)。複数冊、またはバックナンバーをご希望の方は送料が異なりますので、下記までお問い合わせください。

申込先 (株)国際開発ジャーナル社 総務部(発送代行)  
住所 〒102-0083 東京都千代田区麹町3-2-4 麹町HFビル9F  
TEL 03-3221-5583  
FAX 03-3221-5584  
Eメール order@idj.co.jp



次号予告 (2015年2月1日発行予定)

アフリカ

日本人にとっては地理的にも遠いアフリカ。その“素顔”を、一体どれだけの人が知っているでしょうか。アフリカの昔と今、そして将来を見据えた日本の協力について紹介します。

**mundi**

JANUARY 2015 No.16

編集・発行／独立行政法人 国際協力機構 Japan International Cooperation Agency : JICA

〒102-8012 東京都千代田区二番町5-25 二番町センタービル  
TEL : 03-5226-9781 FAX : 03-5226-6396 URL : <http://www.jica.go.jp/>  
バックナンバーはJICAホームページ(<http://www.jica.go.jp/publication/mundi/>)でご覧いただけます。  
本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。



©Yuki Asada

## サイザルバスケットでお買い物

村のマーケットからの帰り道。お母さんたちが手にしている大きな袋には、新鮮な野菜や果物がいっぱい詰まっている。ちょっとやそつとでは破れないお手製のバスケットだ。

ケニアの首都ナイロビから150キロのマクエニでの日常。青年海外協力隊の横山裕司さんが活動するこの街は、乾燥地帯で農業にはあまり適さない。そこで人々の間に広まっているのが、手工芸品作りだった。バスケットもその一つ。使っている素材は、家の軒先に生えているサイザル麻だ。

横山さんは普段使いのこのバスケットに目を付けた。「ひと工夫すれば売り物になるはず!」。現地の女性たちとの挑

戦が始まった。

サイザル麻から繊維を抽出し、一本一本丁寧に編み込んでいく。時にはみんなでおしゃべりしながら、時には水くみや買い物ついでに歩きながら編んでいる。バスケット編みは、彼女たちの生活の一部になっているのだ。

「日本で売るなら、サイズも色も均質にしないといけないという意識が広がっています。ものづくりに対する姿勢に変化を感じます」と横山さん。見違えるように、「職人」としての意地が見え隠れするようになった。

今はみんなで新しく草木染めの研究をしているところ。カラフルなバスケットを見られる日が楽しみです。



編み物の作業は屋外で。仲間と一緒になら仕事もはかどる

★サイザルバスケットを2人にプレゼント!  
→詳細は38ページへ



ケニア  
マクエニ



私の  
**なんとか  
しなきゃ!**

Vol. 51

## PROFILE

1976年ニューヨーク生まれ。慶應義塾大学総合政策学部卒業。TBS系『世界ふしぎ発見!』でミステリーハンターとして活躍した他、オーガニック・コンシェルジュなどの資格を生かし、環境系イベントの司会やレポーターもこなす。著者に『祈る子どもたち』（太田出版）。フェアトレードコンシェルジュ講座主宰。「なんとかしなきゃ!プロジェクト」メンバー。

父の仕事の関係で、高校までの多くの時間を海外で過ごしました。小学校はバンコク。まだ森があちこちに残っていて、毎日走ったり泳いだりして全身真っ黒でした。中学はアメリカに引っ越して現地の学校に入りましたが、最初は英語がほとんど話せず苦労しましたね。少しずつコミュニケーションが取れるようになってからは、いろいろなことを学べるこの国の楽しさを感じ始めました。大学は日本に帰国することを選んだのですが、そんな自分の経験を生かして、海外とつながりのある仕事ができたらいいなと漠然と思っていました。

大学3年の時に縁あってオーディションを受けた映画番組のレポーターの仕事がきっかけとなり、フリーアナウンサーの事務所に所属することになりました。その後にはやらせていただくことになったのが、『世界ふしぎ発見!』のミステリーハンター。テレビで見ていた時は「楽しそう!」と思っていたのですが、実際のロケはとても過酷でした。

その中で、人生のターニングポイントとなった国があります。アフリカのタンザニアです。キリマンジャロの頂上で溶け始めている

一人一人に世界を変える力がある

フリーアナウンサー 末吉里花



氷河を取材するという回でした。でも、それまで登山といえば高尾山程度。とても不安でしたが、登頂前日に麓の学校の子どもたちと植林をしていた時に、「僕たちは頂上に行けないから、氷河の様子を確かめてきて!」と言われ、その言葉を励みに踏ん張りました。頂上からの景色はとても美しかったのですが、一方で、温暖化の現実を目の当たりにして心が痛みました。

そこから環境問題について勉強し始め、フェアトレードと出会いました。雑誌を見ていてかわいいなと思ったワンピースが偶然、フェアトレード商品だったんです。そのブランドの創設者に会いに行き、「ファッションで世界を変える」というコンセプトに共感して、しばらくは彼らの活動をお手伝いしていました。何年かたって、やはりフェアトレードの現場に足を運びたいという気持ちが強くなり、ネパールとバングラデシュへ。工場には託児所や学校が併設されていて、生産者の女性たちが子育てをしながら働ける環境がありました。自然にも人にも優しいフェアトレードの魅力を実感し、この素敵なお取り組みをもっと広めたいと思いました。

そこで立ち上げたのが、「フェアトレードコンシェルジュ講座」です。日々の生活で気軽にフェアトレードを実践してもらえるよう、学んだり、体感したりするチャンスをつくりたかった。この講座を受けた後、日常の買い物の意識を変えた人、大学でフェアトレードのサークルに入った人、障害者をサポートする団体を立ち上げた人、フェアトレード事業を起業した人など、それぞれに大きな変化が見られました。私たちは微力であって無力ではないのです。

地球は広くて、まだ知らない世界がたくさんあります。一度飛び出したら、私は今の人生につながる出会いがあった。最初の一步を踏み出せば、そこから道が開けてくるはず。あなたの勇気が、世界を変えるきっかけになるかもしれません。

「なんとかしなきゃ!プロジェクト」は、開発途上国の現状について知り、一人一人ができる国際協力を推進していく市民参加型プロジェクトです。ウェブサイトやFacebookの専用ページを通じて、さまざまな国際協力の情報を発信していきます。

なんとかしなきゃ で